



續君年書一覽  
十

4加2  
765  
10





門 1 2  
番  
卷

隨筆之部

樂書之部

歌合之部

字書之部

日記之部

類題之部

忠實公の別稱也保延三年の比より久安四年ま  
ての御談話にて其仰に奇事多き中に身有毛の  
人有才事の段大殿仰に身に有毛人の才は有之

# 續群書一覽

百

建保二年正月書寫了



養筆書一覽

百

源合之陪 藤盛之陪  
樂書之陪 日詰之陪  
朝筆之陪 字書之陪

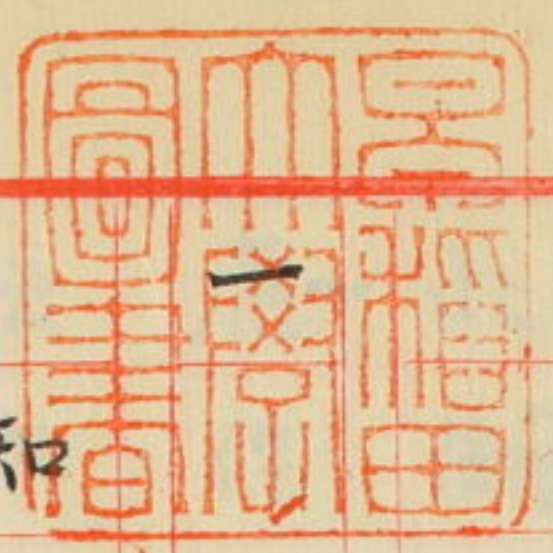
隨筆之部

中外抄

字

一冊

知足院攝政忠實公言談



大外記師元朝臣注進の處一  
号富家語談富家は  
忠實公の別称也保延三年の  
比より久安四年ま  
ての御談話にて其仰に奇事  
多き中に身有毛の  
人有大事の段大殿仰に身に  
有毛人の才は有之  
也近くは我子共関白殿も勝  
毛の人なり云々惣  
て隨筆の体奥書に曰  
建保二年正月書寫了



大外記師元朝臣注付知足院殿仰也以三位入道  
親兼本書了最珍書也此書世間希也 中宮

少進キナマ杯經以右京權大夫公長朝臣本書寫了

弘長三年七月廿七日 公 經判

宝永三年八月 日以三条西本模寫了

從一位實治判

此一冊曉心院左大臣殿御筆也輒不許他借

中宮大夫公修

一 富家語談 寫 一冊

富家関白忠實公談

(第壹號)

此御記は前の篇とは別種にして仁平元年より

應保元年に至るまでの雑話の紀事なり毎條仰

云々とありて可心得事頻多し

奥書

承元五年五月下旬書寫了富家御談仲行所注置

云々

弘安十一年三月廿二日一見了

權中納言兼基判

以禁裏御本書寫了度々加愚見者也 師重判

正和二年十月七日静見了以行法之隙披俗塵中換

古書集字會



益者損

同 三年四月晦日法然之餘養

虫

性

虫

判

同 五年五月六日加一見了

判

享祿二年九月五日以禁裏御本令書写了

大宰權師

判

以道途院前内府自写之本令写了世所流布の  
語談者為抄出件本全備之書也最為珍宝可秘

藏者

安政二年九月

權太納言實萬判

(第壹號)

以原本實隆公一校加朱墨畢

萬延元年壬三月

右少将藤原實美

一 水月集

写

廿五冊

青蓮院一品尊純親王撰

本編は水月水鏡とも画の心なり此は見るとに画

し留め給ひし随筆にして就中親王積年筆道に

御心をよせられ其世に名高き筆跡を臨写ある

処にて朗詠集の如き既に八九種及ひまたは假

名消息の部類を分け或は五條橋之勸進帳如き

も其文法の為に録せらる筆道家無双之至宝と

古書目録



いふべし其祖大乗院尊円親王之筆は字跡種々に分知之影写あり随筆中有益之書也

一 考圃録 写 二冊

難波中納言宗達卿撰

此編は古今の誤りを何くれとなく正される處にて部門を十一に分け和漢の書籍百三十五部を引用せらる其部門は如左

服飾 器用 典籍 附 文画 字圖 彩色

食器 禽獸 附 鱈魚 草木 附 藥品 佛事

僧尼 喪儀 附 墓墳 通用 附 訓字

(第壹號)

此書には珍らしき家々の説を多く挙げ用ひ其考をも附せられ又引用書の中には随分世上流布せざる書籍も見之たり

一 槐記 写 六冊

山科道安輯

享保九年四月小自序

此編は豫樂院攝政太政大臣家熙公の門下に数年道安陪従して其御説を書記す多くは書籍の事文字の事茶事の説香の事其外雑話多し日次を以て記す

古書採字會



一 道庵隨筆

写

三冊

山科道安輯

此編は槐記に洩たる家熙公の御物語をつはふ

に書き和漢の學に涉り書談多し

一 白石伸書

写

八冊

新井筑後守君美撰

此書一名白石叢話と号す編中何くれとなく記

せし中に朱舜水の話数条あり和漢書籍の事織

田氏豊臣氏時代諸侯并有名士の事徳川家國始

の比士人の事源平或は元弘建武人物の事上杉

(第壹説)

武田の事大坂籠城人の事秀頼子孫の事世諺問

答源平盛衰記抄出戸田三郎左衛門戦功の記諸

家姓氏の事官職装束の事為人抄の抄出此余詩

作の事禅家の事等不枚擧なり

一 戴恩記

写

二冊

松永貞徳撰

講習堂松永昌易跋

此書一に歌林雑話集といふ北村秀吟の次嶺経

に云松永貞徳初名は勝熊剃髪して道遊軒と号

し延陀丸長頭丸なといへり攝州高槻城主入江

古書保存會



五郎政次の孫松永永種の子也政次打死の年永種四才にて亀松丸といひしを松永彈正一家の故に養子として生長の後木園寺の僧とせり落墜して貞徳をりめり貞徳和歌を好みて東光院殿に九條植扈從仕り源氏物語を承りて彼御作の孟津抄御奥書して給り玄旨法印に伊勢物語百人一首詠歌大概等の御説を傳授せり和哥の御引直しをかふりぬ中院殿也足軒に徒然草の御説を承り飛鳥井殿にもまうて通ひて哥道の執心年を経し事を戴恩記にしるせり云々

(第壹號)

兼文按するに貞徳翁此余に菊亭右府公紹巴法師清水宗我城勝檢校安休法師等より秘事を傳へれ其師恩を蒙ふれし事をむねとして書あつめ其師話の別して心得を記す木下長嘯子を誂る々條多し

一 昆陽漫録 八冊

青木敦著

宝曆十三年二月十一日小自序

此編和漢蘭の三書籍を涉獵し採萃する処にて金錢の事藥種の事草木の沙汰はとに多く載す

古書採字會



本編は六冊に附属兩卷を合併して八冊とす隨  
 筆中格別珍敷き事外書に増せり然し記録には  
 蘭學ほととの力は見へず徳政を云ふ段に宣胤卿  
 の記を抄出せざるを以ても知べし附録は明和  
 三年十一月脱稿

一 續昆陽漫録 写 二冊

青木敦著

明和九年四月朔日小自序

編中の記事正編に次く

一、窓の寿さみ 写 六冊

鳩巢室新介著

享和九年九月自序

此篇假名書の隨筆にして其時代忠臣孝子の事  
 蹟を多く擧る中にも赤穂義士の異傳または寛  
 永以来江城殿中に於て又傷の事或は天災地妖  
 火事沙汰をはしめ何く水となく綴りし書なり

一 安齋隨筆 写 廿七冊

伊勢平藏貞丈著

此篇は有職の事書籍の事文字の事文武の事軍  
 器の事神佛の事俗語の事其外何く水となく書



綴りし中に卷五六は洗草の記とて別本に有之  
十四の卷は源氏物語之抜書卷廿三は高館草紙  
の抜書多し又神佛の部には聖武天皇聖德太子  
の御事を種々云へり本編は廿五冊目録一冊を  
合し為廿七冊  
一 翁草  
神沢貞幹著  
安永五年正月魯堂漢字之叙明和九年四月撰者  
自序  
叙云開卷觀之亦稗官之流而百四十五年来世説

外目録  
百冊

(第壹巻)

口碑所傳採摭無遺稽考悉備云々然而其内他之  
著述を全部擧るもの義人録国朝舊章録別所記  
戸川記同文通考武野燭談元宝莊子萬国夢物語  
感入録常用書札四十六士論春臺独語名君享保  
録御参内記沢庵百首東武紀行鎌倉記等合四十  
五冊也又抜萃する書目は老人雜話為人録永夜  
茗談耳底記由井根元記古老獨談等の類或は太  
閤記大坂陣島原役将士の武功を擧げ又奇事逸  
事等を集む此集の外續翁草ちりひち等あれと  
本編と同じくしてさして益なき故除

古書保存會



一 閑散餘録

写

二冊

南川士長著

安永紀元龍公美北海江邨綬之兩序高文肅之書  
論以換跋

此篇元和以來巨儒碩匠の言語事跡を摺據す録  
中仁齋徂耒の行事を記する事極めて多し源流  
姓名録に見えたる事は此書に略せり又諸儒中  
著述の多きは東涯に不如四十餘部百六十餘卷  
あり徂耒の著述是其書家に満り其門に著述  
の多きは春臺也白石鳩巢も述作寡きにあらず

(第壹説)

東涯徂耒に次て書目の多きは貝原篤信なりと  
記す兼文按するに白石の著述何ぞ仁齋徂耒に  
下す其著書百四十七部四百廿卷東涯は七十  
七部二百七十九冊也又著書に富たるは林羅山  
の著述百七十一部千九十七冊其子春齋又五十  
八部七百八十七冊次に多きは伊勢貞丈百三十  
九部百六十六冊家に秘して其冊数の不知も  
十九部此等を採ふす唯仁齋徂耒を云は所謂我  
佛尊しの論にあらず歟

一 草廬雜談

写

三冊

古書保存會



青木敦著

元文三年秋九月自序

此編秋雨の淋しまゝに平日諸君子と談論するもの及び聞見する事ともをみたりに書あつめて草廬雑談と名付と云々

一 橘窓茶話

三冊

東伯雨森芳洲著

天明六年五月筱應道安校并序

此編學問の樞要を挙げ古来知れかたき事を考へ詩文書法小説を論じ間々當時の人物を評す

(第壹卷)

る等すへて一家の見を發明し學者の博洽をたすけ初心の才器をすゝましむる且芳洲は對州の儒員なるを以朝鮮の事を記する多し天明六年仲夏上梓

一 一話一言

写

四十六卷

太田南畝輯

此編は慶長年間以來上は天子將軍公卿諸侯の事よりして下は相撲取男伊達俳優の事或は孝子節婦世上に名高き敵討又は諸國へ漂流話其外奇事怪談共確たるものを舉ぐ卷の十二は岡



崎氏何其の著秀吉出生記を載る世上流布の説  
と異同あり又石川主殿頭大坂陣之日記もあり  
其余何くれとなく輯めしものなり

一 南畝叢書

三冊

太田暈南畝輯

卷一 東海談二卷平維章撰維章字子文號東海

稱金吾篠崎氏江戸人也

此書和學家の心得になる隨筆なり

卷二 藤樹年譜一卷蓋門人所録而欠其名

卷三 神巷談苑一卷柳原玄輔字希翊号篁洲稱

(第壹説)

小太郎著附録數條希翊五世孫散文家得  
故紙中載之

此書又種々之隨筆也然るに其編に女房男房と

いふ事盛衰記に頼政化物を射落しければ貴賤

上下女房男房上を下にかへし堂上も堂下も紙

燭を出し松明をと出してこれをみるとあり又

侍中群要にも女房男房とあり上代にはなき事

なりと記す兼文按するに男房の事上代にある

事にて既に西宮抄を始めに見へたり

一 縣居雜録

写

六冊



加茂真淵著

此書は真淵翁種々の書ともを見ろにしたかひ  
て心あることは共き名りいて、五十音にわか  
ちてみつかふ考へをそへたるに長野美波留標  
注を加へしなり古學の益とも多かる書也

一 縣居雜錄補抄

写

一冊

加茂真淵著

文化九年七月長野美波留序

此書は先の篇に洩たれしを集め梓行なせし也

一 結駝錄

三冊

(第壹號)

松岡玄達著

宝曆九年八月葛陂野人高峻序岡元鳳之跋

此記は玄達成章一時の隨筆にしてなにくれと  
なく書しものなるか其中に源義經北國落の砌  
いまた勢不落三萬騎にて安宅を越せし由書た  
りしは余りなる虚談なすや又細川頼有阿保  
肥前守の墓洛中にある由を載る是又今みる處  
なし此余信し難き説多し

一 夏之如久呂

十冊

根岸肥前守守臣著



卷端に自序あり此書は營中勤仕のいとま古老  
 の物語或は閑居へ訪来る人の雑談の思白きと  
 思ひし事共を子弟の心得にならんとおもふ事  
 を書置きよしにて安藤霜臺の話殊に多く又其  
 比籟下の士の談も不少享保元文年間之件有徳  
 院殿御仁政の事なりとも多く載たり  
 一 白川夜話 写 一冊  
 白川少将定信朝臣著  
 此書は信長公秀吉公上杉謙信加藤清正等の心  
 入三淵大和守明知治右衛門可児才藏吉村又右

衛門岡本半助荒木又右衛門等の事廿九條あり  
 て毎一事に定信朝臣の批評を加へられたる随  
 筆なり  
 一 関の秋風 写 一冊  
 白川少将定信朝臣著  
 此書は天明五年三月中旬奥州白川城に定信朝  
 臣御居住の砌何くれとなく心得にあらへきこ  
 と共を假名書にせられたる随筆也  
 一 娛語 四冊  
 間嶋松南長弘著



卷端小自序に云娛語者何也自娛也迂人之語人  
 豈聞之自説自娛或論學術或記雜事随得録之固  
 無序次非示之於人也云々此記和漢之書籍数百  
 部より抄録しまし其比見聞の記あり且後光明  
 天皇の御英質の事御詩等の事戦國英雄の詩作  
 等の事とも載たり

天保十五年甲辰十月晚翠堂藏板

一 凭几漫録 写 一冊

松前志广守辛廣著

文化十四年九月假名自序

年比見聞せし事体の慰怒虚偽なふさを手集  
 する由にて初には老尼物語おあ人物語文化年  
 間の聞書四十條豊臣秀頼以下大坂浪人薩广に  
 落の事高麗船戦古録木田藤右衛門の女支那  
 より音信の事蝦夷地の奇聞其余耳新ふしき異  
 事くさくさを記せり

一 栗田日記 写 三冊

畑維龍著

寛政四年十月七十五叟滄浪居士閑田子伴蒿溪  
 之二序



此書は天明八年戊申の春禁裡炎上により聖護院之宮を行在所と定め給ひしに畑維龍は醫官たるによりてこも又栗田の町屋に假居しぬ此折見もし聞ひせられたる此騒きにより書初め其以前世に知られたる人々の逸事又は書籍の談を多く載せ巻後には回録記事ありて余の日記体の書にはあらず隨筆也又此維龍は阿州の産にて畑に入家しぬ文事に富みたる人にて紫式部の墓碑なりとも建立し奇特なる人なりし由一 雙樹の落葉 三冊

名島政方著谷川士清撰  
 文政七年三月清水濱臣同四年柴田以文の假名  
 両序  
 文政九年十一月高橋知周後叙  
 天保十二年十月河喜田真産之校合上梓  
 此編は名島氏遠江人栗田土磨より聞得し事々  
 を書綴りしよし年山紀聞を引る事多し又傳聞  
 の誤りも不少其擧る處の目錄は  
 上 五十連音 人文字 冠辞 阿志比  
 伎 比佐加多 佐瑤餓尼 伊呂波



旅行以前為門出 真似

中 長瀬神社 御饌殿 賢木 秋茄子

嫁に不食 加太古 天狗 万葉集

撰加 赤深右衛門 百人一首 蔞

茹 草頭藥

下 道祖神 敏太神社 比佐豆知神社

湯立 煤拂 地獄の沙汰も金次第

布久津武 幸伊勢國 波多横山

渡唐天神 須利波太古 六代御前碑

葬儀七附々日 忌日遠附忌 以上

一 雉岡隨筆 前後四冊

五十嵐篤好著

此隨筆はおもひやりにかきたるものにて雑談

も交りたれ共多くは古學家の説の中々なるこ

と、いれをあけてくわしく説き百人一首古今集

のうち近來の注書共に心つかさりし事共をあ

かし万葉集中よりいゝあけたり天保三

年上梓

一 筆の周佐媚 三冊

橘七郎右衛門泰著



文化二年十一月村瀬栲亭源常辰之函序  
 此書卷端は芝屋随筆と題せり和漢の書藉中よ  
 り抄出す事不少又泰か知友の行状を載る事  
 多し中に就て藤貞幹の履歴を記し奇怪僻説を  
 好み高慢にいひつゝの原由を述べたれと藤  
 叔蔵の博識高見には中々比肩すべき書にあふ  
 す又本邦の水品は宇治三之間糸清滝音羽の清  
 水隴の清水大堰川井出の玉水木津川の淀へ落  
 ると山城の國中に八ヶ所を挙げ同國中に水性  
 第一軽き多田湍仲の誕生水及び名水を以て世

に知れたる西八條の水薬師等を漏したるは  
 疎も又甚し又奥羽觀蹟聞老志といふ書は廿卷  
 ありて仙臺府下一儒生の著述なり奥羽二州の  
 風土記に於てはかゝる詳委なる書はあふじと  
 記し撰者佐久間義和の名を闕き且此編は仙臺  
 領は詳かなれと他は疎にして殊に羽州の如き  
 論するまてなまき書を如何にや不審しき書ふ  
 りなり若哉傳聞の誤りなり歟文化三年正月上  
 梓

一 梧窓漫筆

初二三篇 六冊

行書保



太田錦城著

此三編共序跋数人なり此には略す本編は和漢の書を引用して天道性命治乱興亡の事証を揚て己を脩め人を治る規則とす二編は前の遺せるを裒載し末に經書子史詩文のいまた人の考へ到らざる数則を示めす三編は前後編に漏たる奇事瑰説を緝合し仍て其外に舊聞を温燖し古人未發の新得を提示し家庭の訓誨は勿論旁々博聞の資け詩文學習の秘訣を掲けたるなり

天保十一年庚子正月 新鐫

一 見聞録

写 三冊

難波中納言宗建卿輯

此記は武家記録の聞書随筆也其糸目如左

徳川家記 渡邊不難書翰 加藤忠廣父子改

易 紀州頼宣御家老牧野兵庫出入の事 佐

治美作守事 陶晴賢追討の勅宣 毛利元就

起請 織田信長起請 大友義鎮奏状 今川

北條武田の始末 筒井上杉織田三好大内尼

子等の事 土屋總藏傳記 三好家記 長曾



我部記 岐阜龍城諸士傳記 豊臣記 福島

改易記等也

一 篁の玉籤 二冊

六人部是香著

安政二年二月近藤清明假名序

著者の端書ある奥に

いにしへの道ゆき布理にたむけはや五百御野

篁の八十の玉くし

此編皇國學の所謂隨筆にて名題目あり

學文 古道 菅家遺誠の偽書なる證を擧ぐ

國學言靈 朝霞 葦手 荒玉 ぬば玉 た

まきはる 坐摩社 ちの實 湯津楓 髻

華 榊 以上

一 艮齋間話 續共 四冊

艮齋安積信著

天保十一年五月近藤忠謹嘉永二年六月森田楨

之二序

此編雖係一時涉筆聖賢の旨齊家治國之道治乱

之迹將士之得失を評し和漢の書籍を引用して

及窮慎獨之功丁寧に盡す續編は和漢國體の参



差を大に論せり

嘉永四年丁亥孟夏上梓

一中子の比禮

二冊

曾根孝直著

市岡猛彦の假名序孝直は本居宣長の門子にて

書中所々師の筆を加へられし由發端に云

佛の法に天堂極樂なといふ事あるを以て人々

此佛の禍言にまとはされ吾族も此禍言にまとは

はるゝ者おほく子孫も又此禍言にまとはされ

れむ事を思ひてかの須勢理比賣のその夫あし

原色許男命の援け給ひし蛇のひれ蜂のひれに

なそかへて中子のひれとなつて上下二巻と

なしつもし吾子孫の此まかことにまとはされ

むとせは此ひれもて打撥除き也れと也其目錄

は

異法始渡来 佛法の起 釋迦教人之情不有

僧等後世一大事言 宗旨改之始 兩部言事

始 極樂地獄言名 釋迦出生始 鄙俗の葬

祭 世俗の諺 佛氏の七宝 書紀小治田宮

紀 卷末に目錄の和哥十一首を載せ又宣長



の歌二首を加ふ且春庭の詠に  
世の人に布れとはふへすとさつきおふはまか  
はちか古のひれとこそおもえ

文化丁丑年孟春刊成 石倉庵藏板

一 示蒙抄 写 一冊

山岡澹齋伴後明著

門人日下部勝皋補此篇は此國に生れて皇朝の  
國躰を知るへき心もなく徒に佛道儒教をのみ  
事とし學ひ究るは事情に潤れるの甚しき也せ  
めて是我國の其大躰をわきまへ知るへき其

あふましの書籍を八門十三課に區分して近く  
其事を知らしめむとの篇にて

第一國史 神學 禮儀 第二衣紋 法令 茅

三記録 第四軍策 武備 第五詩文 第六和

哥 第七詠哥 連哥 物語 親門 第八上件

各々其みるへき書目を掲げ且其異説真偽を正

したる隨筆にて國學家の一助にすへき書也勝

皋の小跋あり

一 比古婆衣 二冊

伴信友著



弘化四年霜月伴信近之跋

此書に舉る處は日本書紀考日本書紀年曆考附

干支唱考腹赤之事日月蝕之事聖宝僧正道助法

親王日蝕を祈り止め給へりといえる事實の違

へる事を弁す

一 泊酒筆話

二冊

清水濱臣著

此書は近世の哥人のしえにおきておもしろき

はなしをあつめ又は近來の世にしられぬ哥人

の小傳めきたる事もおほく又まゝ哥よむ心得

となることも不少の随筆なり

一 痴談

二冊

寺門静軒著

佐瀬得所漢字序

此書上卷三十四条下十四条假名書の随筆にし

て和漢合併滑稽のはなし多く讀古事記傳之編

には憾あるの筆を起せり

一 川岡雑談

写

五冊

瀬下鶴叟玉芝著

此書は鴨長明東野州徵書記頓阿長嘯子石川丈



山小野お通心越禪師松永貞徳護持院隆允澁川  
 圖書狩野春賀英一蝶樋口弥門寺坂吉右衛門山  
 中原九郎三浦五郎左衛門似雲法師はせ哉翁河  
 村随軒柘植原右衛門市川海老藏木村高敦大岡  
 出雲守忠光原半兵衛昌盛木下直正大久保主水  
 松原遠江守忠喬榊原六兵衛正庸釈契冲園女寛  
 江法印等の小傳逸話及子安靈神の来由其外珍  
 敷事共を書記す奥後に鶴叟玉芝居士六十五才  
 書之  
 諸人もあわとやみく手すさみのあたにかすか

(第壹巻)

く水莖のあと

一 桃園雜記

八田知紀著

弘化乙巳秋岩垣松苗漢字序

此編儒徒の道を論ずるに我國を外とするの非

義なるものある中に頼山陽の政記の論贊三条

帆足某か入學新論に五条非義なる僻論を并駁

し國躰を并ふへき事を知す附録には東照宮

國學に力を盡されし条はた儒者の春秋を熟讀

せざるの并あり

桃園藏板



一 北窓瑣譚

七冊

橘南谿著

文政乙酉仲秋橘春徳大隅目菅原長韶西序橘春

庵叙

編者南谿ハ醫ヲ以テ東西ノ諸州ヲ漫遊シ聞見

博ク勝區ヲ經異変奇物ヲ陳迹樂道ニ通シ詩歌

ヲ好ミ雅変ニ多能ナルユハ學和漢ニ涉リ面白

キ書ナリ

一 雄花冊子

一冊

三浦義徳著

此書蘭阪隨筆卷ノ一ト記ス撰者ハ河内國交野

ノ人ニシテ其國古ノ変トモヲヨリ考証シ河内

志ノ補ヒ不少又其誤謬ヲモヨリ正シ夕リ卷ノ

初メニ松田丹後守貞秀カ尾花重扇ノ事ヲ記セ

ルヲ以テ題号トス總テ古學ヲ好ム人ノ心得ト

ナル事多クヨク國書ヲ引用ヒ夕リ

一 柳庵隨筆

寫 七冊

柳庵栗原信充著

此部門ヲいろはニ分チ古物ノ考証ニスハキ事

柄ヲ多ク載セ夕リ

古書藏書在館



卷一 一 五十六條 内伊勢氏系圖及年表

卷二 二 二十條

卷三 三 四十條

卷四 四 十三條 内日蓮宗派

卷五 五 十五條 内北條氏時政恭時氏時頼貞  
高時肖像  
了り

卷六 六 十三條

卷七 七 十四條 内鳥羽僧正山法師了  
藤樹先生年譜  
了 誣謗スル

以上百六十五條 以下不閲古好家ノ援助ト

十スハキ書十リ

字書之部

一 篆隸萬象名義

写 三十卷 七帖

東大寺沙門空海撰

此編上に古篆中に隸書を大字に記し下段に漢

字を以て字訓を解し反切を委し部門を分て畫

引にす我朝字書に畫引ある矯失也篆字は唐の

遺筆にして其古きをみるに益あり又索引の例

を舉札は

卷一 一 於逸反 上時讓反 示允至反

二 如至反 三 蘇可反 王字方反



玉泉録反  
班古樂反  
墓故隱反

土健扈反  
田徒堅反  
畱記良反

里呂擬反  
兵去皆反  
京居貞反

黃胡光反  
亭古獲反  
邑於急反

門昔瑩反  
土事几反  
文快甫反

司骨釐反  
九古靡反  
民祖申反

人如真反  
男奴含反  
我立可反

臣時仁反  
予翼諸反  
弟徒札反

夫甫俱反  
允謝榮反  
身舒神反

女拏舉反

以下略之了此書京都府下山城國葛野郡梅ヶ畑

村柁尾山高山寺什物一本あるの外所見なし

然も古寫にして其奥書に曰

永久二年六月以敦文生之本書寫之畢

按に永久二年は鳥羽天皇即位七年今を遡る七

百七十一年前の書全部を傳へたるは珍敷限り

なりける

一 類聚名義抄 写 十冊

菅原是善卿撰



此編佛室僧各三本に目錄一冊を附し十巻となす別に部門をたてす只名義をよく解す東寺觀智院本醍醐水本坊本の二種あり少しく異同ありは寫生の私する處なる人歟東寺本は建保の寫にて筆者は沙門慶政なり此慶政は松尾の松月上人にて入采僧也梅尾明惠上人と學友にて智識高き譽れあれば東寺本を以て證とすべし

一 音訓篇立 寫 八冊

撰者しらす

此書天地人の三門に分ち人部は二本也奥書に曰

起注文

吾為利生出彼衡山八此日域降伏守屋之邪見終顯弘法之盛徳處々造立四十六箇伽藍化度一千三百余之僧尼製記法花勝鬘維摩等大乗義疏断惡脩善之道漸次満足矣今年辛歲巳次河内國石川郡磯長里有一勝地尤足稱美點墓所已畢吾入滅後及千四百三十餘歲此記文出現哉

尔時國王大臣發起寺塔願求佛法可



按太子滅後四百三十余年者後冷泉天皇永承年  
間に方る古き字書なりと畫引にあらずして不  
便なりと音訓に到ては其正しき事今日と大に  
違ひあり篇立の部分は

天上 日月肉火三水

天中 木金土毛酉住立章音辛商兩雨ウ

天下 穴一フフ刀リ尸戸羽乙卜卢卓草大

木ノク采自凡旁垂香来小尚丙豆至夏

貝司久與壹第刃乃己克九赤正正止甚

丑又非

地上 人言走手

地中 馬口艸之長四龍閃四白自鼻舟耳

地下 見革皮身骨走黑里田西風角羊瓦儿力

舌方弓多菴龜臣呂麥老毒鬼光牛牙朱

更尤出幸求号半面易申是處古東青九

且甲真元瓜谷処

人上 糸竹玉車女石虫目疔广

人下 米食文口門工享高臺岳豕交友斤戈七

日白子由才良矢巴吊八乞共一生凶ア

韋夕十爻巾欠寸勺斗雜篇次に異同字



書影保存會

監同字迷十二月之律名等を國假名を以て音訓を附したり

一 俱舍音儀 写 全

僧宣賢撰

此編は俱舍論廿卷の音儀にして音訓を左右の下に分ち連語は其下に注す字例は論の字に序にせり奥書に云

元暦元年甲辰八月十五日鈔之了

雖赴初學之勸進猶恥後賢之盧胡若有訛謬

宜加刊正焉

寛喜三年十一月三日書寫之畢

寂尊記了

一 桑家漢語抄 同 十冊

揚梅大納言顯直御撰

此編は新撰字鏡和名鈔等を抄出せし如きものにて武州箕輪壽永寺の庫中より出るよしなり奥書に云

揚梅巫槐漢語抄十卷自官庫潛求之外以東山

左府之御本校合畢尤當家之重書也

文明元年乙丑十二月下浣日

行書保存會



一條桃華老叟兼良書之

右十卷之秘書者楊梅大納言顯直卿之漢語抄

也今度之秘録撰集之勅寫之畢

天正六年乙亥三月下旬

清給事中洞霞老人書之

一 和字考

写

三冊

種子命等和字藕峯師勘考

寛政辛亥自来翁寅綱四言二十句を巻端に裁同

年雲藩桃源藏子深序次漢字之自序并假名叙を

附す

本編の初めは和字五十音自鎌足公附属伊日曆

自其嫡々傳來者也延暦二年三月十一日天児屋

根命廿六代大中臣智治磨と奥書あり甚敷偽書

を信用せしものにて五十字は道家に用ゆる符

の如きものにて書中光仁天皇御宇弘法大師片

假名を平假名に成すの記あり蓋し延暦二年は

空海は十才なり何そ弘法の謚号あふんやつた

ちき偽書也又江匡房齊部廣成此字を知ふす杜

撰の筆記を残す由を録し太宰純貝原篤信此跡

を逐て其妄を主張し海内の人をして我邦元實



に文字無りしと思ひ極めしむ此曹皆本國の擧  
人なりと書す又靈龜二年下道真備作る處の略  
字あり是又例の神符の類ひ也此奥書仁壽元年  
二月日二部日良丸次に長徳三年正月卜部兼  
忠の奥書もありて其猥雜いふ斗りなき編ちれ  
と初學之士迷ひもやせむと其偽りの証しを爰  
に舉ぐ

一 梵語雜名集

写 全

龜茲國沙門礼言撰

八家惣録云梵語雜名一卷とありて此國の著書

にあらずと雖梵語之今日本音と通するまゝあ  
り以て参考の為爰に裁す其通音の一二を擧げ  
は

天 又泥素縛羅 髮 計 豆 磨 邊 盆 梵 拏 宮 補 羅

此余猶多し又龜茲は俱支曩と翻す奥書に云

此是翻經大徳兼翰林待詔光寺帰茲國沙門礼

言集

一 色葉字類抄

写 十冊

内膳典侍橘忠兼撰

此編十七編を以て十巻となす伊呂葉に部分を

古書保存會



して各條の下に其濫觴の次第を畧書せり又和訓を附す小序に曰為童蒙他見せしむる事勿れ云々歌道の志ある士必讀の書なり

一 韻鏡

全

此書は宋之紹興辛巳七月朔三山張麟之子儀所著慶元丁巳重刊する本を以て本邦に於て享祿元年翻刻す蓋是韻鏡之書刊するの濫觴也其事舟橋関翠軒之跋に見ゆ依而今載之抑享祿年間は足利氏之季世天下分崩瓦解争亂無止一日然而此書之鏤板に及ぶ可感也其跋に曰

韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故轉寫之訛鳥而焉焉而馬覽者多困彼此不一泉南宗仲論師偶訂諸本善不善者且從且改因命工鏤板期其歸一以便於覽者且曰非敢擴之天下聊備家訓而已於戲今日家書乃天下書也學者思旃享祿戊子孟冬初一日

正三位行侍從臣清原朝臣宣賢

頃間求得宋慶元丁巳張氏所刊之的本而重校正焉永祿第七歲舍甲子壬春壬子

一 地名河川西字通用考

全

古今圖書集成

古今圖書集成



新井筑後守君美撰

此書兵家の説に山より出る水をは河といひ海より入る水を川といふ俗言を和漢の諸書を引て破したるなり又編中に白河院堀河院後白河院後堀河院何れも河に作り弘安礼節を引て白河をは志魯歌於と称し堀河をは保利歌於と称しまいふす兩朝の御謚白河堀等の地の名に同しかぶ人事を憚りてかく称す由尤心得べき事也

一 助字雅

全

三宅緝明用晦著

此書自跋に曰

漢文之有之乎焉哉猶倭語之有天爾於波匪審其音弁其義通翻和譯若出己口則如胡人之於越語終年不可得而曉也况行之文哉自唐柳宗元言之明人李廷機胡文煥有其解而散見韻會正字通者粗備予居洛嘗輯而説之未能脱藁而末東府與一舊友淨寫以畀若夫詩書古文語録俚談未暇及而遠旅新徙又莫以考諸字書則脱誤蓋居多焉其有以細研潛玩試之行文為用得



的好秀才則亦孰之而已矣元禄己卯之春三宅  
緝明用晦書

一 萬葉集借字對照

全

正木干幹輯

此書は万葉集中にみへたる借字と真假魚字とを

むかへ照て数多の詞ともえり出されたれば本

草和名新撰字鏡倭名類聚抄なにもれていと

古くよりみえたる文字の古訓を知らんには是に

過たるはなし共いふへき書也

一 雑字類編

七冊

柴貞毅小甫撰

西讃辻言恭子禮校明和元年甲申三月自序凡例

此編は事を記し實を録する為に輯たる書なれ

は只質實的切の詞を專に輯て陰私鄙俚之詞を

も不忌して載たり但華藻文飾詩賦の詞は不載

なり部門十八に分ちいろはを以て記す其部門

は

天門 地理 時令 宮室 人品 家倫

官職 飲食 身體 神佛 器用 衣服

文書 錢穀 采邑 人事 動物 植物

古書保好會

古書保好會



天明六年丙午六月上梓ス著者小甫者柴彦輔之  
實弟也

一 四聲解環

二冊

笹山臯門譯註男驥士良補

中川有叙子典美馬璞楚朴校閱安永庚子春三月

源文伯享和辛酉冬十月中川有叙漢字の二序あ

り

此編五十音を以て部門を分ち本朝の人讀書不

解はもと四聲清濁を并明せざるを以て其意難

通和訓之細密なるもの會釋し難く又和訓に細

密なるもの四聲清濁を并知せざるを以て其

益すくなく并知する時は大に字義に助あり和

訓に益あるを以て是を撰する由凡例に載たり

文化元年夏四月上梓

一 假字考

岡田真澄著

奥田鵬齋漢字清水濱臣假名之両序

此書は假名はもと草書の手より流れ来れり所

なるに終には其源の文字の知れ難く成ぬるも

あるを五十音の次第に従ひて委しう考へられ



たゞ也頭書に古人の書體をも舉たれは書法を  
學ふ人にも益ある書なり

一言元梯

全

大石千引著

此書は詞の元の義を詳に考へ定めたるにて  
言は清音のみにて用言には濁音のまゝある事  
詞の言出しを濁る例は一切無之事また字音の  
詞音訓相混する詞なとを詳にす次第は五十音  
分にして檢出に便なふしむ

一 假字便覽

全

大野廣城著

此書對類音便字音濁語假字便覽と唱ふ雅語は  
もとより字音俗語までの假字を詳にすひの音  
便はいろにまかひへの音便はえゑにまかふ類  
を分り安あきやうにさとす

一 正誤假字遣

全

賀茂季鷹著

此書は古事記日本紀萬葉集和名抄に由とつき  
て詞之假字をいろはにして引出すに便なふし  
む

古書保解

古書保解



一言葉のやちまた

二冊

本居春庭著

文化三年五月尾州植松有信本居太平之函序

此書ハ所謂五十連の聲のたてぬきを正し考へ

詞之活用四段にわたり一段にかきり中の二段

下の二段たといて八巻にわきまへたり引出た

る詞は古き文ともにより文化三年春三月しる

せり

一手束杖

三冊

寺田長興撰

津藩高橋知周假名序次自叙凡例略字例あり嘉

永己酉正月齋藤鐵研漢字後叙

此編はいろは分にして假名に真名をそえ初心

に假名遣ひを知らずるに心切最極めたり

一 雅俗幼學新書

二冊

常陽田祐順仲著

安政甲寅冬十月自序同乙卯孟秋順仲男誠之跋

此編每字本音を省き訓義而已を載す音にて通

用する字は音を擧げ音訓両用の字は其義を俱

に載す轉訓あるものは印を加へて其傍にしる

古書精撰 御覽 存心 會覽



古書集成 存

部門を十四に分ち委し載せざるは無し其部  
門は

天地 時候 神佛 官位 名字 人物

身體 衣服 飲食 器財 動物 植物

数量 言語

序言ノ文意ニ依ルニ本書編者ハ楓齋森

源愿ニシテ田祐順仲ハ編者ノ需ニ由リ

序ヲ書キタル也故ニ其自序ニ非ス随テ

誠之ハ源愿ノ男ニシテ順仲ノ男ニ非ル

可シ姑リ記シテ疑ヲ存ス

大重齋誌

一 伊呂波釋文

全

龜田鵬齋著

文政癸未冬十月門人松齋山静後叙

此編卷首に國字考を載せ次に四十八字の正俗

を分ち各其點畫を質し流俗相承の記を証し其

出所を明かにし且卷末に音類假名字考を附録

にせり

一 古今假名遣

写

一冊

橋本稻彦輯

古書集成 存



此書は万葉集古事記日本紀等のかたつかひを  
くわしく訂正していろは分にし初心の為に使  
となせり

一 古言梯標注 一冊

魚彦輯

此書は本居春海清水濱臣三大人の標注を加へ  
和歌之詞之使用とす

一 反音抄 一卷

弘法大師著

卷首自序曰

夫聲字真相之極理者即因頓覺之軌範也諸佛  
出化之本懷唯述字真實之義大聖利物之方便  
無非陀羅尼之用蒼松翠竹之發雅音皆是十二  
律呂之般若也誦詠絃管之調妙曲寧非五大法  
身之演說乎開彼文字通解之門不出返音巧術  
之道尋之儒家四聲之綱目猶暗訪之蜜家悉曇  
之秘藏早迷世已澆季身又未生為之如何而兼  
幸學遮曩之密教漸積稽古之代序宿習相催適  
到性兼之行端冥力資助纔得恒沙之一分然而  
容之器希自負墨之竒瑞談之輩頗有龜毛之妄



見抱璞空泣擊正獨吟或俗士或僧侶自問其  
要津之趣而入未或正紐或雙聲住彼意地之欲  
而傳授仍訪股虔沈約之秘術為顯悉曇五音之  
要樞聊集先哲之紐弄自擬披後昆之矇昧以筆  
書難盡緯就圖弄早悉之于時皇曆執徐之年青  
陽沼洗之候矣

日本國遮那業<sup>業</sup>遍照金剛乘記之

此書者是悉曇字門之鉗鍵反語聲明之燈燭也  
第一四聲韻綱目第二反音大分有二法第三雙  
聲疊韻法第四五音圖第五私斷見圖第六五音

第七五音順逆生次第第八九弄十紐用音法第  
九字母注用音名目第十五句八字連聲第十一  
反音略第十二假名目上略之者第十三又分八  
聲者第十四又八轉聲者广夕躰文ヲ附



樂書之部

一 古本催馬樂

写

全

此譜は堀河右大臣殿之流にて大宮右大臣按察  
 使大納言藤大納言と次第に所傳せられし譜に  
 て藤原貞幹曰此譜藤伊達か本を写す古本之影  
 写也各字傍に拍子を附す是によりて推量する  
 に風俗譜も古本は斯之如くなり人今注せざる  
 を見れば相違あり重て考ふへし奥書に曰  
 天治二年春三月家説移野了口傳

己秘藏也不可有外見歟

鈴歎河

我家



大宮 奥山 奥尔呂己上 沢田川 我駒

貫河 東屋 道口 逢路 鷄鳴 陰名上己

律 件歌或絶後乃数十年或依不傳家説不

出之

貞幹云風俗譜此譜原本を見され共古本なるへ

し巻首一歌の下に朱點の法を注して本に朱點

なし按に何の家にかありけ人本を書肆愉寫し

て利を計るなるへし他日古本を得て朱點を補

附すべし

明和未年余所傳寫之本天明戊申春在一友人之

家化為化塵一字不存寛政辛亥冬以友人橋某氏

本書寫壬子春日一校了左京藤原貞幹

一 神樂註秘抄 写 全

此書梁塵愚案抄と同書にして和歌の相違二三

首あるのみ梁塵鈔は權中納言有俊卿親有瑞と

し二跋の次に明應八年初夏上旬四條一品隆量

入道常恭の奥書の外に又左の一書を附加す

右本明應九年卯月二日自竹田僧正御房借給

之間卯月三日梁筆同六日終書寫之切訖催馬

樂同相交書之

古書集 御案 存 會



釋蓮空 七十七歲

按蓮空は勸修寺頭長卿之法諱也

一 樂舞雜談 寫 三冊

從五位下左近將監狛光真編

此記所々虫損多きのみなす上の巻端二章を

欠き第三左右舞雜談事よりあり第四左右樂雜

談第五舞樂感應事第六樂器差別第七舞樂具呼

名事第八古樂第九細音事第十七國

音事第十一舞曲新說出來事第十二舞曲古今相

違事第十三舞秘曲等第十四秘樂事第十五管絃

秘曲等第十六打物秘曲等第十八雜口傳

天福元年己癸七月日以自筆令書寫了

正六位上行左近衛將監狛宿禰近真撰之

卷中打物案譜法口傳記錄真書

文保元年丁巳八月日以自筆令書寫之

兼秋

卷下樂書と題し巻端を欠き蘊合章央より記す

右件舞曲等於光季之流者殊雖為嫡家之秘事

依難有御命相傳之略記摘要所且所勘進之状

如件

古書集傳



建保五年八月日

從五位下左近衛將監狛宿禰光真上

一 教訓抄

写

十冊

左近衛將監狛近真撰

此書一名嫡家相傳舞曲物語と稱す卷端假名自序に云祖父之跡を追ひ曾祖父の記録を傳へ得て尤も嫡家の流たり而齡既に六旬に満ち一西の息男ありと雖も道にすかす甚悲歎無極者也仍て子を思ふ道には迷ふなれば少少しるしをき舞樂に付各口傳物語は其數覺へ居たるを書

こねをよく / みおほへて譜をみるべし

歌舞口傳五卷第一公事曲第二五ヶ大曲第三

中曲第四他家舞曲第五高瀬曲伶樂口傳五卷

第六舞曲源第七管圖第八無舞樂第九打物第十

記録此辺其舞曲之都度先蹤を衆く引に我朝の

事のみを擧ぐ奥書に云

天福元年己癸六月日以自筆書寫了

正六位上行左近衛將監狛宿禰近真撰

一 五節間郢曲事

写

全

按察使俊量卿撰



此書は丑日帳臺出御 殿上淵醉 唱歌 今様

万歳樂 令月 新豊 蓬来山 水猿曲 物

云舞 白薄様 鶴之声入等の節を詳に記し且

右は永徳永享等の嘉例に依て注之よし次に装

束の事を舉ぐ奥書に曰

右當家説雖禁外見依為郢曲門弟免申一覽之

處刺被透字者也於末代正本可為明鏡也

永正十一年六月一日 按察使俊量判

這本子細見了右奥書者為備後代龜鏡臨之尤

逸少贗本也可禁外見而已

永正十一年六月一日 羽林藤基規判

一 要聚抄

写 全

沙門膽惠撰

此編は鞞鞞一鞞鉦鞞之秘説を載せ其拍子を

秘事と雖も悉く録せり奥書に曰文永八年辛未

六月十二日於南都東大寺南水門邊書寫之同年

七月四日一校了膽惠

右要聚抄一卷者就正四位上伊豆守太恭昌倫宿

禰藏書令懇望膽寫訖干時享保十七壬子歲四月

下旬正五位下行左近衛將監豊原倫秋

古書 書 保 子 會



一 承和樂

写

全

此書は舞譜にして承和樂万歳樂春庭花之三樂  
おの／＼拍子及び委く其譜を記し舞の次第を  
述べたり

一 再興朗詠

写

全

此編奥書に云再興朗詠は九十首抄の中古譜の  
儘にて後世風の博士に移したり違さるやうに  
考古譜に以下同とある處斗は諸譜の趣を以て  
杜撰に定め其假名くはりなと都て九十首抄  
の儘にて臆断せるなり今傳ふる処之十首九十

首抄に載たるを摹書し傍に今の譜をかきて扱

古譜の趣を考れば博士さへあれは分る也其中

如何にも解せざる事あり／＼あり其趣は只古

譜のまゝに移しおき感應の同好をまつ也

今の郢曲花月の句に乏き事人皆恨る處也故に

四季の中句かゝ雅致あり博士も慥なるを拵扱

て今博士風にあふため猶又此中を撰りて再興

せんため数多く寫したる也必此句を皆再興せ

んとにはあらず古譜の博士を今風になおした

る儘にてよく／＼唱試さる事申名誤り多し一



首を再興せるも大事にてあるべけれはよく  
唱合せて後定むへきなり

一 興福寺延年舞式

写

并圖延年連事

全

此編卷端は諾樂春日造替遷宮之明日後宴の舞  
樂に臨み用ゆる處の披露の詞を載す蓋し康正  
遷宮之時興福寺清淨院光胤專信房僧都の草す  
る所也次に開口の詞乱拍子一声糸端一声白拍  
子之歌遊僧拍子歌舞催歌延年之次第書延年連  
事如意珠連事白拍子歌等也藤原貞幹云延年舞

六百年來之記録に散見す如何なる体のものに  
也又清良云住吉繪所に興福寺延年舞圖ありと  
写し出丁奥書

右延年連事平三品時章卿借給之間書写畢

寛政紀元四月

橘朝臣経亮判

一 樂家録

五十冊

正五位下飛彈守安倍季尚著

序跋無し引用書目は奥に記す

此編は樂道之事大概を盡く録し且歴世寺社に  
於て執行せられし樂會の次第等諸家の記録中



より抄出し圖画を加へ其意を詳にし又附録に  
樂面の圖を載たる本あり流布本には無し樂道  
必用の書これに過たるはあふす

一 樂曲訓法 写 全

正五位下飛彈守季尚撰

卷端に漢字の自序あり

此編左樂一百十高麗樂三十五總て百四十五曲  
之名法を万葉の字例を以て記す延享四年丁卯  
之孟春編輯す樂家録には洩たる書也

一 懷竹抄 写 全

此書に載る處は調子合法調子及音管絃七声諸

調渡物横笛 大神政作 箏 權大納言 琵琶 妙音院 箏

同 以上其傳を挙げ舞に付たる音取拍子秘事笛

之譜并相傳人名笛物語大神氏之家系地下傳來

音律具類抄等なり

一 五韮譜 写 全

此編は韮韮鉦韮太韮鷄婁一韮楷韮等之深秘説

口傳を書記す五常樂詠は則房宿祢之傳羅陵王

は狛光則之家説抜頭破は公兼之説舞人行則光

時之云々及打方の秘傳を載す奥書に正四位上



豊原朝臣倫秋書寫之

一新撰樂道類集

正五位下玄蕃助太泰昌名撰

此書に載る處上卷は樂曲製傳記壹越調曲二十

一ヶ曲 沙陀調曲 十箇曲 平調曲 廿一ヶ曲 性調曲

四箇曲 大食調曲 十箇曲 乙食調曲 五箇曲 双調曲

四箇曲 卷下は黄鐘調曲 十五箇曲 水調曲 四箇曲

盤涉調曲 十九箇曲 高廉壹越調曲 廿一箇曲 高廉

平調曲 一箇曲 高廉双調曲 四箇曲 秘曲類高廉壹

越調曲 九十曲 絶樂曲類 凡十一曲 調都合五十一

曲也

一 舞樂傳記

從四位下伯耆守狛近家撰

此書上卷には舞曲家傳記と題し舞曲の作者舞

人之事装束の事を記し下卷は樂并管弦鞞等傳

記と題し其事を委詳にせり奥書には右参考家

傳の篇記粗謹注畢

正徳元年辛卯六月二日

從四位下伯耆守狛宿禰近家

一 樂考

写

全

古書保存會

古書保存會



新井筑後守君美著

此書は樂の造りし時代より其名の起りし原由を諸書によりて考へ正し日本漢土の別を明かにす豊原統秋の語を多く用ひたり是は白石諸説考七種の中なり

一 琴學大意抄

写

全

荻生物茂卿著

此書は琴の起りの事琴の名義の事琴を弾せし人の事琴匠の事琴の名所の事軫の事徽の事絃の事琴の調様の事琴七絃十三徽の定位の事三

声の事指の名の事右指法の事左指法の事譜の文字の事琴の廢れたる故の事享保七年壬寅四月廿八日狛氏の許へ贈るよし奥書に見ゆ又品絃の事を附録にす

一 神樂考

写

全

新井筑後守君美著

此書は神樂三採物歌 十上 大前張 上 小前張 十二 星 三 弓立朝倉寛殿歌 酒殿歌 或説 三 晝目其駒 以上其出所を考へ正し微細の注を下せり

一 樂説紀聞

写

二冊



浩瀨松田健編輯

享保癸卯三月下旬林大學頭僖甫小序

此書は酒井小濱侯の命により其臣松田氏倭漢  
樂書中を抄出し樂官山井主膳正景豊と論定撰  
述し以て呈上す附録樂器の圖は加藤宗碩の筆  
たり記する所は中華にて樂之始の事日本へ樂  
の傳來の事樂之調子の事律呂の事樂曲の名の  
事乱声并振舞の事公家にて樂を業とし給ふ家  
の事地下樂人家業の事和琴の事琵琶の事箏の  
事鞆鞞の事三鞞の事太鞞の事鉦鞞の事笙の事

算策の事横笛の事簫の事拍子の事琴の事祝故  
の事舞樂の器并服の事樂器を入る袋の事本朝  
用ひさる樂の事樂器譜の事朗詠并披講の事神  
樂并催馬樂の事五節舞の事高兼樂の事御遊并  
舞樂の事樂器名所の事等を書す奥に此書を呈  
すると自書あり

一 神山長慶筆記

写

全

此書は宝永四年五月九日より十一月十八日に  
到るまでの目次にして禁中仙洞并に宮方管弦  
御會及び寺社方の音樂等に出役せし事共を遂



一に筆記す堂上方の御相手たる事は勿論にし  
て主上心洞の御所作までも録す巻後に前内府  
公より筆策銘滝波被銘之詠哥御添被進之此管  
甲斐守近純へ被仰付候新管なり  
かけ高き山の岩をよくたくかど雲に聲して  
ひく滝浪

一 管絃記

写

全

水戸宰相中将齋脩卿撰

此篇は文政六年三月二日於柳營有堂上管絃之  
事去年三月一日博任干大樹従一位左大臣右大

將公内大臣儲府並位大臣自鎌倉以来所未聞也  
於是遵庶苑院之故事被賜大饗御遊之樂者此時  
京方南都方天王寺方は管絃を被許処葉山方は  
不許只出座のみなり次に巨勢日向守利和の記  
す癸未記と題する假名書一篇あり中に和哥を  
衆く載す又弥生此御遊と号したる同しさまの  
書を加へ奥に大廣間の圖をかゝげ當日の模様  
を委しく知らしむ

一 問裏録

写

全

丹波竝河良弼著



元禄戊寅仲冬望漢字自序享保九年五月逸竹齋

後叙

此書に載る處曲調壹越調曲五廿今四内沙陀調曲

一十今四内双調曲五平調曲今廿三九内道調曲内廿今

六大食調乞食調四性調曲今六五内七黄鐘調曲内十内

七四水調曲一四内盤涉調曲四十七内角調曲内三一

七高麗樂曲三内七十六内存章樂目詩賦此書一樂

毎に其褒貶を記す

一 周伶金玉抄 写 全

此編に録する處序破急の拍子を委し舞之用意

おし加注す奥に太靴譜あり鉦靴之相方乱声の

事鞞靴譜音取諸樂八拍子物八声之事壹越譜三

靴譜蘇合三帖乱拍子の事等を詳にす

寛文十二年七月八日令書画了

近伯耆守近元 七十一才

一 残夜抄 写 全

孝道撰

此書一名迷路抄と号す管絃の記にして其子の

為に残せしもの見へたり其記する歌に

人のおおやの心は闇にあふねと此子をおおふ



道に迷ひぬるかな

編中一は御遊二は舞樂三は式講四は十種供養

五は人に物をしふる事六は人に習ふ事七は調

子のうつりかわりめやう八は樂の間の事九は

音の事十は物を秘すへきやう十一は物のたか

ひめの事十二は打物の事十三は樂器の事等を

くわしく述べたり奥書に云

以近衛関白家基公自筆之本寫之

一 吉野吉水院宝库樂書

写

全

此書卷首二行欠奥又所々欠けたり樂道の事何

く礼となく種々記せり奥書に曰

宝永二年五月廿一日

大秦昌倫寫之



日記之部

一 土佐日記考證

写

二冊

岸本由豆流著

此書は紀貫之の著にして古き注解これあり世  
に行はると猶し北かたき事多かるを北村  
季吟僧契冲真淵翁本居宣長村田春海其外古人  
の説を残すすあけまたみつかふの説をも加之  
前本十五種をもて校正す此日記は正本といふ  
べし

一 土佐日記燈

写

二十四冊



富士谷御杖著

卷端大旨には紀貫之一世之考案を委しく記す  
次に校合の本書数部之傳來を載せ其異同は各  
条下に擧之文化十三年三月廿一日の記なり脱  
稿は同十四年五月廿日之奥書に見へ此日記之  
附注こゝに於ていたれり盡せりといふへき篇  
也

一 中勢内侍日記

写

一冊

中勢内侍著

此内侍は閑院冬嗣公之八世伯耆守範永九代從

三位永経卿之女也弘安五年八月月見之御宴よ  
り正應五年二月に至るまで行幸行啓節會御會  
等之時によめる和歌及び其規式をもくわしく  
載る

このたひもみわにすいるをよきにきししより  
はたうとく杉の木にわをみつけたるもおも  
しちし  
とし月は行衛斗知ふて過しかと  
けふたつねみるみわの山本

一 方丈記註釋

写

二冊



法橋仁木宣春著

元本は鴨長明法師之著也天和元年孟冬下旬整

字林直民甫漢字叙次に此記之抄及び長明の系

圖并一代之紀事を擧げ本文を四段に分てみる

事をおしへ和漢之書を博く引用して委しく注

解す元禄九年八月八日之假名自跋之奥に書し

て曰

執筆於長明影前而詠一首和歌静裏亭源泊翁宣

春

うつし繪にさしむかひつゝ明くる

外山のいほのあとをしたひて

一 おもひの儘日記

写

一冊

二 條 関 白 良 基 公 撰

此編は年中之行事をはしめ禁内の事共くさく

書給ひし中に此比までは斯る警固もありしに

やたし太平記に記し其後の大乱にて跡なくな

りしとおもひ居たる都にはまた京白川かけて

さるへき武士の家々公家の人々柄家にはまし

ぶす大内を中におきて作りなふへたり四十八

ヶ所のかしりとかやきひしければ夜なみ



おそれしなし

又奥書あり此日記は春日の神の御告なれはみ

人人は萬の願叶ひおしふことあましと人の

しけるにて侍るとかや

一衣かほきの日記 写 一冊

同撰

此書は貞治二年五月十一日於禁中御鞠會之記

也奥書に曰

文明十二年十月書進室所殿中書也件御本巻物

自御書給之今度草子也不審事有之以證本可校

合者也

於江州柏木郷書之

判

右榮雅真筆写申者也

天正二甲戌年正月廿六日

判

一 志分かさの日記 写

一冊

参議基綱卿撰

此書は延徳二年四月廿八日園母仙院之三回の

聖忌にて同廿六日より五ヶ日禁中に於て御八

講をおこなはれける御記也

假名書の後序の奥に



あわれいかにこの世なかしの君かため  
つかふとなふはうれしかふまし

一 永正日記 写 一冊

飛鳥井兼雅卿撰

此書は和歌懐紙短冊の認様同會序次第口傳等

注之奥書曰

右之聞書は去ル永正十七年之夏於防州山口御  
本所様御下向御滞留中に受御家之説注之了又  
大永七池永清南僧頓世之砌於旅宿随分懇望  
付寫書了殊之外御秘藏候ツルヲ借用中候可努

秘 杉田日記 一冊 田甫

清水濱臣著

此日記は濱臣獨歩にて蒲田杉田の梅見に旅た  
ちしをりし紀行也哥は杉田にてよみし長哥一

篇のみにして文辞なたふかにおもむきあり

一 東照宮五十回御忌辰日記 写 三卷

此篇は寛文五年四月十七日東照宮五十回忌に  
あたふせ給ふによりて於野州日光勅會之御

法事執行せさせ給ひしにて四月朔日より六月



五日に到るまでの日次にして其規式をいとつ  
はふかにしのせり

歌合之部

一 光明峯寺歌合

写

一冊

貞永元年七月於光明峯寺攝政家之哥合

題

寄衣戀

鏡筵弓

船玉

左方

權大納言基家

春宮權大夫良実

兵

部卿成実

前宮内卿家隆

資季朝臣

家長朝臣

賴氏朝臣

親季朝臣

知

宗 中宮少將

右方

民部卿典侍

權中納言定家

信実朝

臣 忠俊

隆祐

源家清

行能朝臣



中宮但馬 下野兼康 正三位知家

判者權中納言定家 百十番二百二十首人

此集奥 百首題あり又奥書に曰

干時寛文五歳首夏下旬書寫之一校合了

右近衛權中將藤原

判

一 齋宮歌合

写

一冊

天曆十年二月廿日於齋宮十二番歌合也

題 霞 春風 梅花 鶯 春雨 若菜

柳 櫻花 欵冬 藤花 不會恋 會恋

讀人は兼盛忠見中務之三人也

(第壹號)

一 撫子歌合

写

一冊

天曆十年五月廿九日左衛門督のみやすむとこ

ろの御方のこたちのなてしこあはせの哥左中

務君右兼盛合三番六首也奥にこれはあわせぬ

うたとて書し

としをへてうめのをらすになてしこの

はななきめとてめつるなるへし

一 宰相中將君達春秋歌合

應和三年七月二日大納言忠家御之作春秋くふ

への百首にして巻首

古書保藏繪



咲花くの心のとかなる

春としりせは春をまたまじ

一 建保職人歌合

写

一冊

題は月と戀にして廿四番歌合也作者及画工と

も知らす後年甘露寺親長卿之職人歌合もあり

混すること勿れ伊勢貞丈曰去年北村春水翁の

物語に職人哥合はあまた品ある物なりと云々

又異本あり校合するに哥并判の詞は同ふして

繪は異なり画工別人なるへし又歌は飛鳥井二

樂軒筆画者之名不知もあり

一 職人哥合

写

一冊

烏丸大納言資慶卿賛歌狩野永徳の画左右廿四

番題は月と戀卷首醫師

村雲のかりれる月のくすしには

よらのあらしそなるへかりけり

一 道堅法師自歌合

写

一冊

細川入道道堅撰

此集独吟左右廿五番歌合也跋文また作名なり

其末に褒貶の判詞あり奥書に曰

明應六の年しわすのはしめの八日これをしる



す 正六位上 凡河内俊恒

又奥書

右一冊道堅法師自歌合也件本從親王御方申出  
書寫了彼本後柏原院勅筆也未遂一校者也干時  
永録十二曆夏六月上八日

正五位下行左近衛權少將源通勝

以右之奥書之本書寫校合了 幽齋叟玄旨

一 將軍家十五番歌合 写 一冊

室所將軍義尚卿之歌合十五番世題なり奥書二

曰

此歌合文明十四歳七月上洛之時從大納言殿  
給短冊三十枚可献題之由蒙仰之間判進之俄  
被支配三十人被成歌合云々後七月於比叡山  
東坂本旅宿依仰早速加判詞不及思案任筆恐  
怖々々 榮雅上

一 虫哥合 一冊

木下長嘯子撰

卷首に自序あり左右十五番歌合にして題は虫  
のみなり判者藪本の墓と作名す  
元禄のほしきのへいぬにやとる霜ふり月中の



八日梓行之

一夜燈集

編輯者知す

写

二冊

此集は歌合并歌仙部類にして収む處左の如し

世六人歌合右哥仙之哥尤号秀逸之哥三首筒俊成卿被注置了奥一首は近衛公被書

加訖

親教世六人歌合貞和三年三月廿日勸修寺傳正榮海撰自序

女房世六人歌合哥三首宛

中古歌仙自後鳥羽天皇至藤原清輔世六人

新世六人撰歌合後鳥羽天皇御撰一人三首宛

(第壹號)

新世六人歌合一人一首宛自定家至丹後

職人哥合鳥丸光廣卿作判詞なし歌二首あり

秋十五番歌合定家卿作

五行歌合同

同後京極良經公作

十二類歌合水無瀬河釣殿當座六首歌合也

一荷田在湍家歌合一冊

賀茂真淵判清水濱臣校

此歌合は荷田在湍家にて催されしにて判者賀

茂翁也翁の哥合の判せられたるは此外にはな

古書探源繪



しと判詞之跋言尤奇絶也附録には真淵翁春  
道大人のものとて歌の會ありしおりの人々の  
哥に真淵翁の評せられたるをあつめて清水濱  
臣校正して附刺す其評詞卓絶にして後世の評  
言にことなることおほし

一 幕朝年中行事歌合

二冊

作者北村再昌院季文法印

判者桑名少将定信朝臣註者堀田攝津守正敦朝  
臣左右百題五十番之哥合にて天保十三年八月  
朔日季文法印假名序文政癸未五月林衡漢字之

(第壹號)

跋凡例に云此百首哥合は貞治の年中行事歌合  
に習ひて五十番とす徳川氏執政中正月より十  
二月にいたりて月次に其式の次第を逐てこれ  
を定む一年兩度に及ぶものはそのはしめをと  
れり又定例の外臨時の行事ありこは臨時の部  
に收む題の如きは巻端

左 兔美

たりにあへは千代のためしに成にけり  
雪のはやしに得たる兔也

右 屠蕪白散

古書録序



延とりのふ千代の豊くきを

君にさしけて祝ふけふかな

天保十三年八月朔日浄書同月四日献上す又奥

書并再記あり

類題之部

一 蘭桂和歌集類題

二冊

大虚庵元悦撰

此類題ハ三玉集之所々誤れらるを正さむか為に

此のせしよしにて三条西實枝公公條公西公之

御集之正しき本とももてせしと山本周禎か跋

に見へたり又奥に公條公無題百首を載たり文

化十三年丙子正月梓行之

一 類題和歌補闕

六冊

加藤古風撰



此書ハ世に行ふ類題和歌集の題のみあけて  
歌の欠たる貳千九百余首なるをうぶみ代々の  
勅撰家々の集歌合なとより採集め且題の誤字  
を考へ訂されたれはよむ人のかならず机辺に  
おくへき抄なり

一 草根集類題

二冊

源躬弦抄

此書ハ徹書記正徹の家集にして棗本翁の撰へ  
る草根集の中よりいとめつふかなる哥ともを  
えりいたされてとに古寫本をもて校訂せられ

四季戀雜の類をわかつて懐中本となしぬよし  
を記せり

一 三槐和歌類題

二冊

沙門慈延撰

三槐は中院通村通躬通茂三卿の共に大納言た  
りしをもて書名とす此三卿の家集より類題に  
分ち寛政八年八月刻す上卷々頭年内立春

春やけさ立かへるふん年はまた

ちかきしはてす出る川瀬に通茂

下巻の初は初冬



いつもきく軒端の松に吹かへて

むへ山風も冬そはけしき  
通村

一 類題風月集  
三冊

近藤芳樹撰

萩原廣道序及撰者の附言あり

此書は三代集八代集を始め家々の集より類題

の詠哥を輯め部門を分つ安政三年上木

巻頭立春

春の来るあしたの原を見渡は

霞そ今朝は立はしめけり  
俊頼

(第壹説)

一 雙玉類題  
二冊

柗齋撰

此双玉といふは木下長嘯子松永貞徳翁二人の

詠歌を乞ふひ類題となしたる書なり二家は元

和寛永の高手世の人しる処なり

一 類題俳諧哥集  
二冊

四方歌垣撰

此書は世々の勅撰家々の集或は物語文また歌

合の類なとよりすへて俳諧哥の躰にわたるも

のを残さすもふさす書集て今の世の狂哥とい



へるは古の俳諧躰なるををしふしむ上は奈良の朝より下は近代に至るまでもろいはなし且所々に傍注を加へたり

一 吐屑庵和歌集類題 写 二冊

沙門 撰

此書は部門を四季雜に分ち巻尾に藤川百首芳

野紀行を附す巻頭歳中立春

おしまるゝ年の日数の春にけふ

りつれはかわる名残ともなし

一 獅々巖和歌集類題 一冊

聽雨庵蓮阿撰

此書は涌蓮法師の集にして此僧伊勢人なりし

か山城嵯峨の山陰に庵を結び念佛三昧の余暇

に詠み出し哥共を安永三年上人身まかりし後

にたれ波の集め置しを吉田元長の持居たりし

を寫し維清の梓行する処也獅々巖は其庵の名

たるよし蓮阿の跋に見へたり哥数八百九十三

首巻後には和州巡覽の紀行あり文政五年文月

藤井維清の序巻頭歳中立春

棹姫の霞の衣ひとせに



ふたしひ春の色やみすらん

一 紅塵和歌集類題 二冊

沙門蓮阿撰

此書は東湍契冲長流真淵宣長千蔭春海蒿溪秋成大平久老成章枝直季鷹其外近世の高名家のみの詠哥を拵け卷末は長哥及び撰者の小序あり卷頭年内立春

玉くしけふたしひ春はめぐりきぬ

また一とせも暮あへぬ間に 東湍

一 新紅塵和歌集類題 二冊

(第壹説)

吉葛盧嘉言撰

文政十三年霜月撰者の小跋

此書は前編に入りたる哥共をまゝ出す事あり

作者は涌蓮澄月慈延黄中御杖濱臣高尚與清千

楯信友廣足雪臣春庭躬弦蓮阿春門敏夏其外教

十名なり卷性恭平多欽樂

治れる世は久方の月にまひ

花にうたひてあそぶ春秋 信美

一 怜野集類題 十二冊

清原雄風撰



文化三年六月一日千蔭同年十一月八日春海の  
 序跋次に凡例あり此集は雄風古體の類題なき  
 を懐み千蔭春海等に謀りて世一代集をばしめ  
 萬葉集古今六帖等より乞り出し類題をせり  
 一類題草野集  
 十二冊  
 木村定良撰  
 文政元年神無月清水濱臣同二年二月椿園主人  
 の兩序あり  
 此集は契沖長流真淵宣長より近世千蔭春海等  
 の歌を撰み出て類題とす

(第壹説)

春上	八百四十九首	春下	八百九十首
夏	千八百八十二首	秋上	九百十四首
秋下	千八十六首	冬	千百二十三首
意上	七百五十一首	意中	五百四十九首
同下	七百二十六首	雑上	七百三首
雑中	千九首	同下	千百八十首
以上題数	四千十四首	以上題数	一万千四十三首
以上歌数	一万千四十三首	以上歌数	一万千四十三首
以上文政	五	以上文政	五
一類題	兼玉集	二冊	
夏目麿	撰		



天保十一年正月廿九日藤原千廣假名跋

此集文化以来近世の詠歌をあくる処にして教

歌三千二百余首也安政五年八月上木

一類題青藍集 二冊

秋元安民撰

嘉永六年三月出雲國造尊孫序

此集は近年名高き人々九百九十一名の歌を類

題にわかち撰ひ卷末には其姓名録を附せり卷

頭哥には

仲たかにも立にけるかな君か代は

(第壹歌)

いつくの春もかくそあるへき 國造尊孫

つほみにてかめにさしつる梅の花

今朝咲そめて春は来にけり 久具正典

一 和歌明題集 一冊

尾崎雅嘉撰

寛政乙卯季冬自序

此書は明題部類に洩たる祖題をあつめてひと

つゝのよみくせをい其題を出されたる年月日

題者等をいしなしつけ奥によみ合せ名所を記

し引書をも載せたり



一首題	二首題	三首題	五首題
七首題	九首題	十首題	十三首題
十五首題	二十首題	卅首題	四十首題
五十首題	百首題	詩句題	經文題
假名題	名所題		
以上			
一 增補和歌明題部類	二冊		
此篇は一首題より千首題までの組題并經文題			
詩句題等は其出所年月日を委しく記し夫より			
假名題五百余首を集めて題の部を分つまた			

(第壹號)

證哥は載せず







